

第三章 この「身体」^{からだ}で学ぶ——縄文の海①

京都大学初年次教育ゼミ「ポケゼミ ワークシヨップ」

「頭でっかち」からの脱却

京都大学の人たちとはとかく「頭でっかち」になりやすい。

京都大学の研究者が主催する、とあるイベントの手伝いをしたことがある。様々なブースが出ていて、その一つに地鶏とブロイラーの食べ比べコーナーがあった。二種類のチキンソテーがあり、名前が隠されている。

「どちらが地鶏で、どちらがブロイラーでしょうか」と問うのである。

参加者全員に肉が周り、さあ、味わおうと口に入れたとき、突然、主催者の一人が答えを言い出した。

「こちらがブロイラーです」

「えっ、早くない？」

と思っていたら、地鶏を持ち上げ、ブロイラーを総叩き。古式ゆかしい、典型的な自然食自慢を話し始めた。参加者が味わう時間も当てる時間もなく、延々と主催者のうんちくを聞かされたのである。初年次教育を企画するとき、これらの体験が頭をよぎった。「新入生を『うんちく』好きの『頭でっ

かちな京大生』にしない」。そのためにはどのようにすればいいのが問題であった。

「困難」に直面するプロジェクト型学習

ここで取られた手法はプロジェクト型学習 (Project Based Learning) と呼ばれるものである。近年、大学教育で頻繁に取り上げられているものの、共通の定義や方法論が確立しているわけではない。日本におけるプロジェクト型学習・PBLのメッカである同志社大学PBL推進支援センターではこの学習方法を「一定期間内に一定の目標を実現するために、自律的・主体的に学生が自ら発見した課題に取り組み、それを解決しようとチームで協働して取り組んでいく、創造的・社会的な学び」としている。

今回は、課題は教授者によって設定されたのでこの同志社大学PBLの定義をもとに我々が関与したプロジェクト型学習とは「与えられた課題を一定期間内に実現するために、自律的・主体的に学生がその課題に取り組みながら、次々に出てくる新しい問題や困難に立ち向かい、それを解決しようとチームで協働して取り組んでいく、創造的・社会的な学び」であると記述出来るだろう。そう、ここでの定義のポイントは「課題の発見」ではなく、「問題」や「困難」との直面とその乗り越えなのである。プロジェクトが終了した今、それはそのまま、この授業が度重なる「問題」や「困難」の連続であり、その中で学生たちが成長したことを表している。

「ポケゼミ」はゼミナール形式で行う京都大学の初年次教育の一種で、京都大学総合博物館では大野照文が昨年から、提供している。昨年度は博物館の「子ども博物館」の出張企画に受講生が手伝いとして参加するかたちで授業が行われたらしい。不幸なことに、比較的楽だったこの昨年度の活動が学生の中で広がり「博物館のポケゼミ、ちょろいらしいよ」という風聞が流布してしまったようである。四月の夕方、館内の一室に集められた学生たち八名（二名欠席）は「今回のポケゼミ、皆さんで夏休みにオリジナルのワークショップをやってもらいます」と告げられ、青い顔になった。

「えっ、楽だって聞いてたんですが……」

「まあ、大丈夫でしょう」

と怯える一回生をなだめ、和やかにキックオフを迎えたものの、その後、食堂で「絶対抜けるなよ」と全員で誓いを立てたそうである。

といいつつも、後々に分かるようにここに集まった一回生、かなり優秀な子たちで結論から言えばワークショップは成功裏に終わるのである。

順序が逆になったが、今年度のポケゼミ。一回生たちにワークショップを作らせて、博物館で一般客に向けて実施する。冷静に考えるとかなり無茶な企画である。というのも、この学生たち「ワークショップ」が何か、まったく知らない。おまけに数カ月前まで高校生か浪人生、どっちにせよ、受験戦士として知識詰め込み型教育の渦中にいた人たちである。

「ワークショップ」とはそのものずばり、「作業場」を意味する。教育の場面では何らかの作業を通

じての学習活動を指すことが多い。そのやり方には市民社会での合意形成系、心理学のグループセラピー系、ニューエイジに影響を受けた心身変容系、さらにはミュージアム・エデュケーションの鑑賞教育系など様々なものがある。

しかし、ワークショップで飯を食っている専門家もいる状況下で、新入生に突然ワークショップを作らせるというのはかなり難しいように思えた。実際、授業を担当した大野は大学生たちがワークショップを行うということに最後の最後まで半信半疑であった。

一回生たちをどのようにワークショップ成功まで導いたのか。ロードマップを示そう（註1）。

学生たちを温めてアイデアを生み出す

さて、最初の授業はキックオフということで自己紹介がなされた。二回目の授業も夕刻より、二時間程度。ここでは受講生に「ワークショップ」が何かを知ってもらうために大野の「三葉虫観察」ワークショップを行った。これで受講生全

1

授業自体は毎週この時間、というふうには決まっておらず、受講生と担当者の日程調整で授業日が決まっていた。フレキシブルで対応が楽だが、これが一方では後々問題を生み出す。

体にワークショップのイメージが共有されたものの、受講生が作るワークショップがこの「三葉虫観察」ワークショップに引っぱられ、類似したものにならないか懸念が生じた。授業後、教室でピザを食べる。

三回目は一日授業となった。ワークショップのテーマとしてあげられたのが「縄文時代の貝塚」である。これは京都大学総合博物館の「文化史」領域の協力によって実現したものである。

そういうわけで三回目は文化史の考古担当妹尾裕介の授業から始まり、その後、実際の土器や貝塚から出土した貝殻などを拝見した。それから皆で学食ランチをして、午後は私から簡単にワークショップの説明。そして、チームを四つに分けてアイデアを出させ、二つのチームごとに交流をさせる。交流といっても相手のチームのアイデアに難癖をつけさせるというギミックを用意した。これによって攻めと受けの交流は必然的に生じるようになる。さらに交流していたグループを一つのチームとし、出てきたアイデアを統合するように指示を出す。こうして、攻撃的な交流と統合的な交流が機械的にセッティングされたわけである。

ここらへんになるとその場に出ているアイデアの著者性が失われ、受講生のアイデアへの拘りがなくなっていく。つまり「自分のアイデアが通ること」よりも「課題に対して適切なアイデアを準備できること」に焦点が移ってゆく。統合を急かせながら、受講生たちの机の上でワークショップのかたちが生まれていく。このような交流を二度ほど繰り返す。

そのうち、終わりの時間になり、全体で二つのグループを作ろうということになった。が、ここで問題になったのがフレキシブルな授業運営である。学生たちの出席可能な時間を聞いていくと全員が揃うことがほとんどないことが分かった。仕方ないので次回集まる日を二つ作り、そのまま、それが

班になることになった。こうして、思い切り適当なかたちでワークショップの班決めが行われたのである。

「貝輪ができない!」

比較的順調に展開していったのが「貝輪」班である。この班は縄文時代の遺跡から出土するアクセサリーである「貝輪」を実際に貝から作成する、このプロセスをワークショップにした。

この「貝輪」作りのワークショップ自体はそれほど珍しいものではないので、私自身、ワークショップの枠組みが決まった時点で簡単にできるだろうと楽観的であった。

四回目のミーティングで「貝輪」作りが決まるのであるが、このときもまだ様子見という具合でそれほど、学生たちの主体性が強く見えてはいない。五回目のミーティングは午前中であったが、その際は「貝輪」作りで用いる石を拾い、博物館にあったハマグリの貝殻で試行することになった。その際も「貝輪」作って博物館で用意してくれるんですね」という感じがありありで、石拾いもモタモタとして、さらにはサークルの仕事で欠席した受講生とばったりあうなど、端から見ると頭を抱えなくなる気分であった。

そして、実際にハマグリで貝輪を作ってみると、これがまったく出来ない。貝輪は貝殻の真ん中を石で叩いて穴を開け、それを大きくすることで作られるのだが、ハマグリを叩くとパラパラと貝殻全体が崩れてしまうのである。キリで穴を開けたりサンボールで溶かしてみたりしたが、さっぱりであ

る。これ無理じゃないかと貝輪班、絶望するも「あつ、時間なので」と一人、そして一人と帰っていく。

ブレイクスルーと回り始めるプロジェクトチーム

六回目、前回、休んでいた受講生が合流。カクカクシカジカと前回の事情を話すと「じゃあ、やってみようか」と石を持ってハマグリを叩く。ポトンと真ん中に穴が開く。「あれ？」と全員きょとんとした。この受講生異様に手先が器用なのだ。「違う違う、それじゃ強すぎる」と周りの受講生に指南する。すると、一人二人とハマグリ我真ん中に穴を開けることに成功していく。

「これはコツがいるね」

「そもそもハマグリだと材質的な問題で限界があるのかも知れない」

こうして、コツを知る専門家への接触と本来の貝輪作りで用いられる貝の採取が議題として上がったのである。

ここからがこの班は早かった。リーダーを中心に役割分担が決まり、トゥードウリストが組み上がっていく。それまでライン（LINE）上でやり取りをしていたのであるがリーダーの提案でメールグループが作られ、担当者を中心に作業の締め切りが決まっていく。

「次回、集まれるのは大分先だから、とにかくオンライン上でのやり取りが重要」

こうして貝輪班のオンライン・ワーク・システムが構築された。

その日のうちに、受講生たちはワークショップで使用するプレゼンのパワーポイント・ストーリーリー

を作り上げていった。夕方から始まった授業は最終的に十一時を回って終わった。私は終電を逃した。

「貝輪作りの実績がある博物館は島根と愛知にあります」

情報収集担当の受講生からメールが来た。安く行けるのは愛知。愛知の博物館にメールをするように指導する。その間に私は先方に電話連絡し事情を説明、根回しを行った。粗相がないように受講生のメールをチェックし、先方とやり取りをさせる。

愛知までの車は大野が出すことになり、七月のある日、大野と受講生四名が愛知県の吉胡貝塚へと向かった。受講生三名が吉胡貝塚にいた学芸員の増山禎之氏に貝輪作りの方法を学ぶ。このメンバーたちが実際のワークショップでの指導においても活躍することになる。

その間にリーダーが貝塚近くの海辺に向かった。貝輪作りの原料となるベンケイガイを採取するためだ。先方の資料館にはストックがあることは伺っていたが受講生たちは知らない。もし浜辺に貝がなければその時点で万事休す。そのように考えていただろう。果たして、浜には一面ベンケイガイが広がっていた。かき集めると数百枚近くになったという。

こうして貝輪班は順調にワークショップの準備を進めていたのである。

停滞と危機

もう一方のチーム、後に「標本班」と呼ばれる方である。このチームもひとまず、四回目のミーティングで、「縄文時代の貝塚から出土して現代も存在する貝を分類するピング型の標本箱」を作ろうと

いうところまで進んだ。

しかし、次のミーティングがなかなか決まらない。一月近く放置されていて、貝輪班の進捗状況に一定のめどが立ったところ、リーダーに発破をかけた。しかし、五回目のミーティング、リーダー欠席、私も京都大学に行けず、自宅からウェブで参加というイレギュラーなものになった。リーダー不在というのが痛手となり、この回で大枠が見えたのだが意思決定が出来ないまま、私との唯一の通信手段だった大野の携帯の充電も切れ、時間切れとなった。

六回目は前期の試験前日であり、リーダーは「とにかく、早くケリを付けてテスト勉強をしたい」と勢い勇んでやってきたものの、

「前回の出席者から聞くに話がよく分らない」

前回の会議内容を誰も議事録としてまとめず、全員に連絡をしていないうえに、そもそも意思決定をしていないから実は何も決まっていない。

リーダーが「あれ？うちの班、まずい？」となってきたのがこの頃である。夜に集まるもいかにせん、夕食の買い出しに一時間もかかってしまうのである。個々人のリーダーシップが乏しいことが判明する。

六回目のミーティングでなんとなくかたちを作っていると、こちらもまた十一時を過ぎて、私が終電を逃すことになる。とりあえずは「縄文時代に利用されていた貝を当てるクイズを出し、それに正解すると標本箱ができる」というワークの大枠は完成した。

オンラインでの会議とリーダーの覚醒

ここからは標本班の真骨頂である。貝輪班と同じく、皆で会える機会がない。だからオンライン上でやり取りをすることになる。しかし、なかなかうまくいかない。

たとえば、標本箱を準備する担当の受講生がひとまず、手製で標本箱を作ってみて写真をアップする。しかし、ガムテープで継ぎ接ぎの標本箱は、量産は愚か、クオリティが小学生の工作程度と低すぎて却下となった。その次に、百円均一のピルケースが案として挙げられたが小さすぎて貝殻が入らない懸念があった。これはリーダーがお祭りに行く道連れ柄、担当者と京都の街中で会い、ケースを見せてもらいその場で却下となった。最終的に、担当者は百円均一のコレクションボックスを候補にするのだが、写真を見るに小さくないかと一同疑問を持った。しかし、もはや日数もない。「それで行こう」と受講生たち、ゴーサインを出してしまった。帰省中の担当者は街中の百円均一を地元の友人たちと手分けして探し五十個準備して博物館に送った。

ワークショップがお盆のまった中に企画されたのも痛手だった。貝の標本のために様々な種類の貝殻が必要となった。担当の受講生はオンラインショップで購入できると踏んでいたが調べてみるとお盆休みでワークショップ当日に間に合わない。担当者は京都中のスーパーを探すなどほうほうの体で揃えたものの、今度は貝の中身を処分しないといけない。グツグツとすべての貝を煮ると、下宿が貝臭くなってしまったという。

ちなみに前出のピルケース担当者は帰省中の地元の（潮干狩りシーズンオフの）浜辺で緊急の潮干狩りを実施し、コレクションボックスとともに博物館に送ったのだが、どれも小粒でさらに身が残っ

ていて驚異的な腐臭を放ち、没になってしまった。

混乱の標本班であったが、リーダーの指数関数的に伸びていくキャプテンシーによって何とか形になっていく。ライン（LINE）上では深夜にまで及ぶ会議が繰り返され、ライン（LINE）の自動通知の切り方が分からない大野が不眠に陥るというアクシデントもあったが、何とか、ワークシヨップの全体像が見え始めた。

腐臭を放つ巻き貝と長いプレゼン

こうしてやってきたのはワークシヨップ前々日のリハサル。最終調整の日にも関わらず、標本班には大きな課題が二つあった。一つは標本箱。帰省中の担当者がいないから大きさが分からない。しかし、どう考えても小さいというのが全員のコンセンサスである。しかたないので、博物館に埋蔵されていた小型のバスケットを贈呈する。「あつたなら最初から言って下さいよ」という受講生たちの目線は一切無視である。

そして、担当者が必至に集めた様々な貝殻。すべて洗剤で洗い乾いている。これをそのまま使えば良いはずだった……が、そこはかとなく漂う腐臭。巻き貝を中心に身が残り、含まれる水分のせいで腐り始めている。

標本班はリハサルもできずに大量の貝殻を塩素系の漂白剤で洗うという作業に追いやられることになった。

一方、順調な貝輪班である。翌日に館内でワークショップを控えていた京都市立紫野高等学校の教員が連れてきた娘さん（小学生）を相手に実際にワークショップ前のプレゼンとワークショップを実施してみた。これがうまくいった。やや、プレゼンが長いのではないかと心配したが貝輪はうまく完成し、彼女の夏休みの自由研究になった。

ワークショップは成功したか？

万全の状態でワークショップ当日を迎える。前日にも標本班は作業のために博物館に来館。ちょうど、その日にコレクションボックスが到着し、予想通りの小ささでそと私のデスクの隅に積み上げられることになった。

ワークショップ当日は少し曇り。お盆休みとはいえ、平日の昼前、それもお盆とはいえUターンラッシュに切り替わった頃、人はそんなにこないだろう。大野はお互いがお互いの班のワークショップを体験して、終わりになるだろうと思っていたらしい。しかし、それではこの数カ月の努力が報われない。果たして、お客さんはやってきた。両ワークショップを合わせて、延べ人数四十三人。当初想定していた小学生はほとんどおらず、団体鑑賞の高校生や高齢者ばかり。

標本班は比較的順調に進み、とくに問題なくやり過ごしていた。一方の貝輪班。やはり、最初のプレゼンは一回目のお客さんだけで終わり、後の人は「時間がない」と急かされて断念することになった。いかんせん、貝輪作り自体、時間がかかってしまう一方で興味を引きやすいのである。

「やりたいんだけど、時間がない」

という声が大きくなる。私は受講生たちがどのような対応をするか、観察していた。

貝輪班の受講生たちは急遽、ペンケイガイのネックレス作りのコースを新設した。比較的小さなペンケイガイを一撃、穴を開けてタコ糸で見栄え良く、縛ってペンダントを作った。これは驚いた。臨機応変、状況に応じて的確な対応ができている。これならお客さんも満足するだろう。もはや「縄文時代」というテーマが崩壊しているようにも思えたが、ここは気にしてはいけない。当時、こんなペンダントがあつたなんて話聞かないが、ここでは指摘してはいけない。いや、気にはなるがそんなことよりお客さんの笑顔である。

終盤にかけて標本班にも思わぬアクシデントが訪れる。二人の少年と若い女性がやってくる。少年たちは台湾からやってきた旅行者で、若い女性が親戚で通訳をするという。しかし、標本班はクイズありき。テンポよく説明をしないとだれてしまう。

そんなとき、標本班のある受講生が歩み寄り、流暢な中国語で二人に話しかけた。奇跡的なことであるが、この受講生、京大入学以前は上海に住んでいた帰国子女なのである。この受講生の活躍により、台湾からの少年たちは楽しそうに帰っていった。

困難と成長

さて、このような実践の中で受講生は何を学んだのであろうか。受講生たちの振り返りから簡単に

紹介したい。受講生たちによると、この授業は高校までの授業や普段の大学の講義とは次のような違いがあったという。

「ワークショップを通じての社会とのつながり」

「グループワークでの協同性」

「自分から動かないといけない中での能動性」

「正解がない、曖昧なゴールや課題の中での自己判断」

「何かを創り上げていく創造性」

このような特徴を持つ、この授業において自分自身に何らかの変化¹¹「学びの実感」がどの程度のものであったのか。十人の受講生に五段階で評価してもらったところ、「5」が七人で「4」が三人であった。「4」をつけた学生も、自分自身の「できなさ」に気づき、もう一度、同じような協同学習をしたいと述べている。

本授業のようなPBL型授業は全国の私立大学・地方国立大学ではポピュラーなものであるが、京都大学ではめずらしい実践である。普通の京大生なら体験しない、この授業の中で学生たちは社会に必要な「協同性」や「能動性」「自己判断」「創造性」を発揮して「学びの実感」を得た。当初こそ、教員がリードしない「正解のない」授業に戸惑いを見せたものの、計画を立て、日程が迫る中で持ち前の能動性と柔軟性で難局を乗り越えて行ったのである。



(蒲生諒太)



